

# 中央アジアからデリーは遠いか？ イスラームのインド的変容における一考察

村山和之 共同研究員／本学非常勤講師

## —はじめに

本稿は、総合文化研究所における研究プロジェクト「中央アジア諸民族の文化諸相に関する動態的研究」（代表：坂井弘紀）により、研究員：村山和之が実施した、2006年度現地調査報告である。

調査は、2007年2月23日より3月12日までを要し、訪問地はインドではデリーとバーニーパト、パキスタンではラホールという三箇所を選択した。いずれの場所も、南アジア・イスラーム史において、重要な役割を果たしてきた高名なイスラーム聖者廟ダルガーdargāhを擁し、都市として聖地として発展してきた共通点を持つ。

今回の調査目的は、2005年に実施したウズベキスタン訪問を通して、南アジア・イスラーム世界へのイスラーム文化の発信地としての側面から中央アジア世界を読み解こうと試みた時に必要となる具体的な情報を、インドそしてパキスタンの地で収集することである。

調査の視点は、世俗的な現世利益祈願の場として繁栄するダルガー、およびその祝福の呪力が及ぶ有形・無形の聖域環境において、何が非中央アジア・イスラーム的な要素であるかを識別することにおかれた。それはつまり、ダルガーで見られる参詣のパフォーマンスにおけるヒンドゥー的な要素を見出す作業と言い換えることができよう。

神の下での平等観を説く点でイスラームの本質は、原則的に地域や人種に左右されることなく適合されていると考えられる。一方で、インド世界古来の伝統ではヴェルナとジャーティによる区別が著しく強調されるが、その要因の最たる基盤は「下位カーストとの接触によって生じる穢れから上位カーストを守る」ことであった。つまり、「浄・不浄」の観念によってバラモン主導の人間社会の統合性を維持してきたのである。

イスラームが説く清浄観とインド・ヒンドゥー的な清浄観が、聖者の墓廟を共

同して作り上げる過程で選び取りまたは放棄した接点は何であったのか。その差異を検証することで、中央アジアと南アジアのイスラームを分かち要素を抽出できるのではないか。

加えて、ムガル帝国の時代から聖者廟に宮廷作法の導入がなされたといわれているが、それはどういう点なのか。

以上の問いを胸に、本調査では「聖者の宮廷 (darbār, ダルバール)」とも呼ばれるダルガーにおける参詣者の一挙手一投足を注視し、「聖者の宮廷作法」を叙述することから、この聖域に踏み入ることとした。なお本報告は、和光大学ばいでいあにて一般公開の研究会として開催した2007年6月3日の「聖者の宮廷作法考—南アジア的イスラームのイメージを求めて①」、および9月30日「聖者の宮廷音楽考—南アジア的イスラームのイメージを求めて②」における口頭報告および討議を経て作成したものである。

なお紙面の都合とパキスタンでの調査が若干足りない点から、今回はインドの報告のみとし、パキスタン編は2008年2月の調査で得られた知見を加えて作成し本誌で報告したい。

## 1——調査行程と調査地の大概

2007年2月23日より3月12日まで、インドとパキスタンの三都市を訪問し、ダルガーを中心とする聖域において参与観察による資料収集を行なった。また、スーフィズム関係の文献収集や宗教芸能パフォーマンスの映像による記録も並行して行なっている。踏査の詳細は以下のとおりである。

- 2月23日 成田よりパキスタン航空でイスラマバードへ。イスラマバード泊。
- 24日 イスラマバードより空路ラホールへ。  
乗り継ぎ便を待つ間、ダーター・ガンジ・バフシュ廟にて下見。  
空路デリーへ。デリー泊。
- 25日 日曜のため休養。デリー泊。
- 26日 デリーにて情報収集。デリー泊。
- 27日 バスでパーニーパトへ。ブー・アリー・シャー・カラダール廟訪問。  
廟境内宿坊にて一泊。
- 28日 パーニーパトのイスラーム施設訪問。バスでデリーへ。デリー泊。
- 3月1日 デリー、ミール・ダルド廟訪問。民間医療師訪問。デリー泊。
- 2日 ミール・ダルド廟、アミール・フスロウ廟、ニザームッディーン廟  
訪問。デリー泊。
- 3日 空路でラホールへ。ラホール泊。
- 4日 情報収集 (JICA:小出氏)。ラホール泊。

- 5日 ビデオ修理、楽士との打ち合わせ。ラホール泊。
- 6日 バダル・アリー&リズワーン・アリー楽団記録。ラホール泊。
- 7日 情報収集。ラホール城周辺訪問。ラホール泊。
- 8日 ダーター・ガンジ・バフシュ命日祭 (ウルス) 初日調査  
演劇調査 (イフティハール・タークル劇団)。ラホール泊。
- 9日 ダーター・ガンジ・バフシュ命日祭 (ウルス) 二日目、宗教音楽カ  
ウワーリー音楽会調査 (廟内)。ラホール泊。
- 10日 ダーター・ガンジ・バフシュ命日祭 (ウルス) 最終日、宗教音楽カ  
ウワーリー音楽会調査 (廟外)。ラホール泊。
- 11日 空路でイスラマバードへ。パキスタン航空で東京へ (機内泊)。
- 12日 成田着。

ラホール (パキスタン)、パーニーパト (インド) そしてデリー (インド) は、ア  
ーリア人のインド侵入からパンジャープ定住、そして東進して拡大する歴史的な  
ルート上に存在する。太古から侵略者たちの道、交易者た  
ちの道、そして求法者たちの道として中央アジアへ至るこ  
の道は、16世紀にムガル朝によって著しく整備された。そ  
れこそ大幹線道路として、帝都アグラからデリー、パーニ  
ーパト、ラホールを貫きハイバル峠の入り口であるペシャ  
ールに至る、現在のGTロード (Grand Trunk Road) である (地図)。



本調査では、このGTロード上の三都市を駆け足で巡った。パキスタンでは、ラホールはおろか全南アジア中のスーフィズム信者 (スーフィー) から最も敬愛される聖者アリー・フジュヴェーリー Ali Hujveri、通称ダーター・ガンジ・バフシュ Dātā Ganj Bakhshの963周年忌命日祭 (ウ

ルス' urs) の下見と記録を試みた。インドでは、デリーのニザームッディーン廟 Nizāmuddīn の日常における宗教儀礼音楽カウワーリー qawwālī の記録をおさめること、そしてパーニーパトのブー・アリー・カランドル廟 Bū Aī Qalandar のダルガーへの参詣を実現させたかった。

デリーとパーニーパトは、訪問時期が2月だったせいか、日本の春のように過ごしやすい気候であった。むしろ涼しいといってよい。日中は半袖シャツでも平気だが、日が落ちると薄いショールの一枚でも纏いたくなる。パーニーパトでは雷鳴とともに降雨にも見舞われた。春祭りホーリーを避けるように、その当日ラホールに逃げた。凧合戦で有名な春祭りバサントは終わっていたが、ラホールの気候も涼しく、高原にいるようであった。涼しい環境でパンジャービー人と接すると、今までとは異なった好印象がもてた。二つの春祭りに恵まれなかった日程ではあったが、聖者の命日祭ウルスは三日間とも訪問することができた。

全行程を通して、ほぼイメージどおりの調査成果が得られたが、副次的な収穫にも見逃せないものがある。ダルガー周辺の聖域に見出せる民間医療師（アーミル āmil）のヒーリング儀礼を偶然記録することができ、カウワーリー楽団を密着して取材することもできたからである。

## 2—インドにおけるイスラーム聖者の宮廷

### 2.1. デリーのダルガーにおける所見

#### 2.1.1 ハージャ・ミール・ダルド廟

ハージャ・ミール・ダルド Khwāja Mīr Dard (1720/21-84/85) は、デリーに生れた高名なスーフィー思想家・導師であり、ウルドゥー語のガザル詩人である。雅号は「痛み」を意味する「ダルド」を用いる。両親ともにスーフィーの教団に連なり、父はナクシュバンディー教団の創始者の、母はカーディリー教団の始祖の血筋にあたる。音楽を禁止しているナクシュバンディー教団の中であって、ダルドは優れた音楽家でもあり、音楽を使った修道儀礼サマア samā' にも参加していたという。シャー・グルシャーンやミヤーン・フィーローズといった最高の音楽家たちが出入りしていたダルドの一族は、音楽に対する造詣が深かったのである。彼はサマアを、拒否するものでもなく習慣とするものでもない、と考えていた。ここでガザルを一首。

「世界を旅せよ 無知なまま過ぎるは空し 人生に残りあろうと 若かりし日は戻らず」 [アルヴィー：50-58] [Schimmel:31-102]

ダルド廟は、ニューデリー街区とオールドデリー街区の狭間、ザキール・フセ



図01 ダルド廟への入り口



図02 ハージャ・ミール・ダルドの墓石

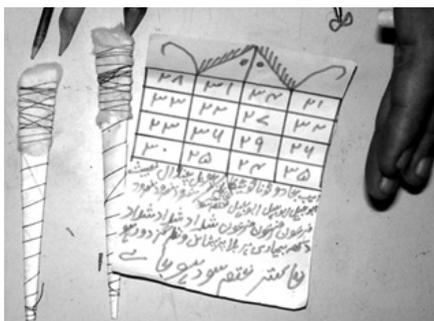


図03 タアヴィーズ

イン・カレッジの真後ろに作られたハージャ・ミール・ダルド・キ・バステイと呼ばれるムスリム居住区の中に位置している。トルクマン門からも近い。この廟には、本年度以前にも2005年9月のウズベキスタン調査の帰路に訪問している。中央アジアのブハーラーを拠点とするナクシュバンディー教団は、インド世界へ入ってきた最も新しいスーフィー教団であり、デリーにおけるこの教団の聖跡を訪ねたかった理由から、情報収集もかねて真っ先にこの地に参詣したのであった。

この聖跡は、ダルド一族を中心とした墓所（マザール mazār）の周囲を、円形に緑色のフェンスや薄い壁で囲い、小バザールや居住区が、墓所を中心としてできあがっていた（図01）。

しかし、この廟には日常的に多くの参詣者が訪れるようには見えなかった。参詣者をあてこんだお供え物や土産物売る商店はみられない。参詣用の線香は雑貨屋で買うことができたが、花や奉献布の類は持参するしかなさそうである。墓石には灯明台併設の物もみられ、線香と赤いバラの花が捧げられている（図02）。壁の入り口で履物を脱ぎ、中に入ってダルドを含む幾つかの墓にお参りし、後ろ向きで（尻を向けずに）外へ出る。この廟は参詣前に体を水で清めるウズーを行なう施設がなかった。しかし、履物を境内に持ち込ませないという最小限のマナーは守られている。

面白いことに、廟の周辺にはイスラームの民間治療師、祈祷師たちが集まっている。アーミル āmil（自称スーフ

イー治療師といっている)と呼ばれるこの祈禱師たちは、目的に応じて護符タアヴィーズ ta'vīz (図03)を作成したり、薬品を調合する。また、悪霊にとり憑かれた病人から、憑依物を除去するエクソシストでもある。後に、他のダルガーにも同様の施設が存在することに気がつくが、ここダルド廟近くの民家の中で、初めてアーミルの一人と知り合ったときは気分が高揚したものだ。本年度は、旧知のアーミル、ムハンマド・イスラーム Muhammad Islām 師のおかげで、悪魔払いの儀式を偶然記録することができた (図04)。



図04 アーミルのムハンマド・イスラーム師

その詳細は稿をあらためたいが、ヒンドゥー女性 (20歳前後) の患者から「邪気 shaitānī hawā (シャイターニー・ハワー)」と呼ばれる憑依物を除去するための小一時間ほどの儀式が、偶然訪問した私の目前で始まったのである。憑依する物としてブートゥ bhūt やジン jinn などの幽霊や精霊、ブリー・ナザル burī nazar やナザレ・バド nazar-e bad と呼ばれる邪視の名称を知ってはいたが、今回のシャイターニー・ハワーは初めて知った。ある意味で、新種の悪霊名の発見かもしれない<sup>1)</sup>。ダルド廟では、マザールとその周囲に存在するアーミルとの関係性を今後さらに深く調べて、ダルガーにおける宗教と経済の実態を明らかにしてみたい。

### 2.1.2 アミール・フスロウ廟

アミール・フスロウ・デヘラヴィー Amīr Khusrau Dehlavī (1253-1325) は、北部州ムーミンプル生まれ (図05)。父は奴隷王朝 [1206-90] 軍に属するトルコ系貴族、母は名門のヒンドゥー教徒であった。彼はヒルジー朝 [1290-1320]、トゥグルク朝 [1320-1413] の支配者11人に顧問官として仕官した。1284年、チシュティー教団の聖者ニザームッディーン・アウリヤーの弟子となり、スーフィーの世界に入



図05 アミール・フスロウのイメージ

1) カラーチー大学ウルドゥー語教授ムイーヌッディーン・アキール博士に尋ねたところ、シャイターニー (悪魔的)・ハワー (気・空気) の「ハワー」は、気・空気の意味のほかに「(激しい) 欲望・欲求」を表すハ瓦斯 havas の意味も持つことから、「性的欲望」にあたる、とのご教示をいただいた。

った。しかし、フスロウは、官僚としてよりペルシア語や古ヒンディー語の詩人、北インド古典音楽の創始者にして最高位の音楽家として現在も親しまれている。

フスロウは一文学者として、高名なペルシアの詩人サアディーの流音・流麗さを自分も欲しいと思い、伝説の聖者ハージャ・ヒズル Khwāja Khizr が現れた時にその恩寵を求めた。しかし、ヒズルは既にその恩寵はサアディーに授けてしまったと答える。フスロウは同様の願いをニザームッディーン・アウリヤーに叶えて貰ったといわれている [Sharib, 2006:86]。

17世紀のムガル朝時代、シャージャハーン帝が築いたラール・キラールことデリー城、そのディーワーネ・ハース（特別謁見の間）の北壁と南壁には、ペルシア語でフスロウの詩句が描かれている。この豪華な宮殿を祝福するようにそこには、「もし地上に天国ありせば、其はここなり、ここなり、ここなり」<sup>2)</sup>と。

芸術や学問の聖者として、文学や音楽の世界で修業する人たちにとっては、宗教や性別の壁を越えて参詣に訪れるべき場所となる訳が容易に理解できよう。修道儀礼音楽カウワーリーの創始者としても崇められており、この境内にはカウワール・バッチェ qawwāl bacche と呼ばれる、フスロウにカウワーリーの手ほどきを受けたと自称する職業音楽家たちも集まる。

そのフスロウのマザールは、ニューデリーの南方、ハズラット・ニザームッデ



図06 アミール・フスロウ廟

2) Agar Firdaus bar rue Zamin ast, Hamin ast, Hamin ast o Hamin ast.

ーン・アウリヤー Hazrat Nizamuddin Auliya と称する文字通り聖者ニザームッディーン・アウリヤー廟を中心とした街区の彼のダルガーの入り口に位置し、死してなお愛する師の門番をつとめている。

道路からダルガー街区に入る参道そしてバザールには、インド・イスラームのあらゆる要素が凝縮されている。ミルザー・ガーリブなど高名な詩人の墓、肉屋、香水屋、花屋、旅行代理店、イスラーム本屋、スーフィー治療師のオフィスを見ながら辿りついたフスロウのマザールは、尊師ニザームッディーン・アウリヤー廟の40m手前の入り口に、まるで守門役のように位置していた (図06)。廟の正面には香炉が置かれ、参詣者が線香を絶やすことはない。小さな内室には裸足になり頭を布や帽子で被って入場し、棺に献花し祈りを捧げて願掛けをする。外側の屋根側面には看板に、ヒンディー語とウルドゥー語の二文字でアミール・フスロウ廟の記述がなされている。

このダルガーで気がついた事は、参詣者が棺の周囲を歩く方向と祈りの際に立つ位置の関係についてである。仏教でもヒンドゥー教でも、インド古来の宗教では聖体や神像に対して体の右側を向けながらその周囲を回るプラダクシナー *pradakshinā*、日本語では圍繞 (いによ) や右遶 (うによ) と呼ばれる参詣法をとる。これに対して、イスラームではメッカのカーバ神殿の周囲を回るときは、体の左側を向けながら歩く。ところが、このダルガーでは、狭い事もあってか、イスラーム聖者の墓に対する回転方向はまちまちである。中には一周せずに退場する参詣者もいた。

入場すると中央に棺が縦におかれ、その左側と右側に、人が集まれるスペースが辛うじて見られる。ところが人が多く集まるのは左側なのである。これは、棺の向きから判断すると左側がメッカの方向 (キブラ) にあたり、イスラームの葬送慣習に法って埋葬者の顔はメッカに向けて葬られていることから、聖者の正面で祈り、願掛けをしたいと考えての位置取りではないか。ダルガーの内部でも、場所によって微妙に願掛けのパワーバランスがあるのか否か、ぜひ次は問いかけてみようと思った。

### 2.1.3 ニザームッディーン・アウリヤー廟

#### 2.1.3.a ダルガーと聖者の宮廷儀礼

ニザームッディーン・アウリヤー *Nizāmuddīn Auliya* (1236-1325) は、インド亜大陸世界において傑出した聖者であり、所属するチシュティー教団においてはバーバー・ファリードゥッディーン “ガンジェシャカル” *Bābā Farīduddīn Ganj-e-Shakar* 直系の後継者である。メヘブーベ・イラーヒー *Mahbūb-e Ilāhī* 「神に愛されし者」の愛称でも呼ばれる。

ニザームッディーンの祖父母は、中央アジアのブハーラーから当時学芸や宗教活動が盛んであった北部州の都市バダーユーンに移住し、ニザームッディーンは

この町で生れた。幼少時に宗教者であった父を亡くし、母によって教育を与えられる。裁判官になる夢を抱きながら学業に励む彼が出会った師こそが、ファリードゥッディーン“ガンジェシャカル”であった。

21歳にして師に入門してスーフィーとなり、必要な修業を終えた彼は、師の代わりにデリーに遣わされた。それ以降、デリーを拠点に、施政者との軋轢に苦勞しながらも、チシュティー教団の教えを広めてゆくのである。彼を慕う弟子たちはニザーミー派Nizāmiyyaと称し、同じく“ガンジェシャカル”の高弟の一人アラウッディーンAlāuddinを慕うサブリー派Sabriyyaと共に教団の発展に寄与し続けている。

一生涯を宗教に捧げたニザームッディーンは清貧と独身を貫いた。さらに、精神生活や宗教活動の自由を守るために、デリースルタナット時代の王（スルターン）たちに迎合せず、あくまで距離をおこうと固執した。自分の意に従わないニザームッディーンを排除しようとした王たちは、結果として宮廷内の抗争や事故で命を落としている。

そのエピソードの一つが、ニザームッディーンがトゥグルク朝のスルターン・ギャースッディーンに贈った言葉である。現在のヒンディー語の諺「ディッリー・

ドゥール・ヘイ」の源となったペルシア語「デヘリー・ハノーズ・ドゥール・アスト」である [Subhan : 223]。直訳すれば「デリーは今はまだ遠い」で、「道なお遠し、前途遙か」[古賀・高橋: 655a] の意味を持ち、目的達成はまだ先であることを表す。遠征先からデリーを立ち去れと通告してきたスルターンの使者に対する返答がこの言葉で、その結末は不慮の事故によって死んだスルターンがデリーに戻れなかったこととなる。

さて、アミール・フスロウ廟を左手に階段を下ると正面にニザームッディーン廟がある (図07)。境内は白い大理石が敷かれたテラスになっていて、左側には男女別のマスジッド（モスク）、右手にはカウワールのオフィス兼住居、後方にはウズーのための水場、香炉、出口に沿って供物や土産物の商店や廟の管理者た

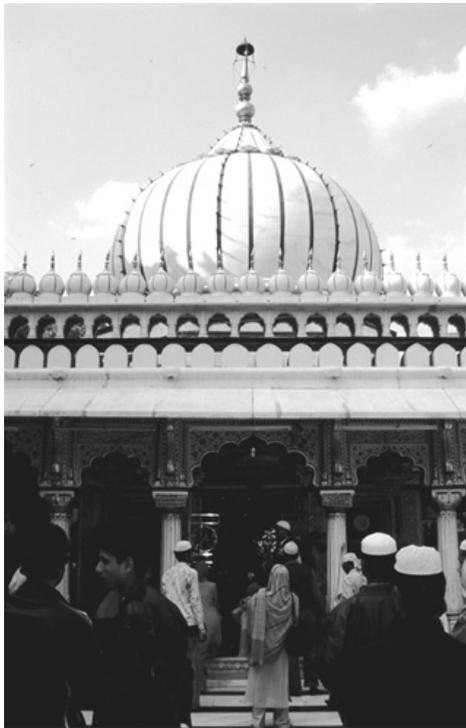


図07 ダルガー本殿（正面より）

ちの部屋が並ぶ。廟の正面広場はカウワーリーを聴くスペース、廟の入り口脇には喜捨を集める世話人が陣取る。

まずは、マシッドで外国人を案内していた二人の人物に声をかけて自己紹介と訪問目的を告げる。友好的なモードで許可は得られ、その「水戸黄門の印籠」にも匹敵する二人の名刺を頂戴する。この二人とはガッディー・ナシーン gaddī nashīn (聖者の後継者)<sup>3)</sup>



図08 境内の参詣者たち

の地位にある兄弟で、兄のハージャ・タキーウッディーン・ニザーミー師と弟で廟の責任者でもあるムハンマド・サルミー・ニザーミー師<sup>4)</sup>であった。子どもをもたなかったニザームッディーンには姉妹がいたが、ともにその血筋にあたる人である。ニザーミーの名は、ニザームッディーンの子孫を表している。

これで、この境内では自由に取材ができることとなる。インドのダルガーでは、過去何度も、世話人であるハーディム khādim たちにより、半ば強制的に喜捨と記帳を要求されることが多く辟易していた。このダルガーでも例外ではなく、個人的に喜捨は必ずする心持ちではあるが、よく分らないうちにまるで義務であるかのように高額な喜捨を要求されてきた記憶がある。しかし、今回は同様の状況の際にこの名刺が効果を発揮してくれた。要求された時に名刺をみせて「取材許可は得ている。喜捨は後から自分の気持ちだけさせてもらおう」と一言添えることで、驚くほど彼らの態度が豹変した。

棺を納めるダルガー内には、独身であった聖者への配慮が窺われ、女性は立ち入れない。彼女たちはそれでも、廟の壁に接近して聖典を読んだり願掛けを熱心に行っていた。女性たちはブルカで全身を隠したり、頭部をドゥパッターというショールで被って参詣に来ている。スカーフの洋装の女性もいて、比較的緩やかに自由にみな聖者に会いに来ているようだ。男性も頭部を隠せば問題なく、棺に詣でて退場する際に尻を向けぬよう後ずさりしながら歩いていた。男女共に、水でお清めをし、ダルガーの建物に手を触れ、接吻し、聖者の体から発信されているバラカ(祝福の呪力)を自分の体に取り込もうとしている。まるで、神社入り口での手水の作法や、仏閣で線香の煙を体の弱い所へなすりつける行為と共通しているようだ(図08)。

3) 聖者の後継者としてダルガーの管理責任を担う地位は、ガッディー・ナシーンとサッジャーダ・ナシーン sajjada nashīn である。両者とも同様の機能を果たすが、後者の方が聖者の子孫にあたる関係が強い。

4) Khwaja Taqiuddin Nizami Syed Bukhari (Gaddi Nashin Dargah Sharif) Syed Muhammad Salmi Nizami (In charge of Dargah Sharif)



図09 サルミー・ニザーミー師

「ちょっとコーヒーでもごちそうしましょう」。

外国人を見送ったサルミー師が声を掛けてくれたので、ダルガー裏手の小さな売店の奥にある一畳ほどの小さな事務所によばれることにする。コーヒーが届けられる間、ビデオをまわして英語でインタビューをした(図09)。神秘主義をテーマにした外国の学会に招待されることもある彼は、インターネットと携帯電話で世界中の信者や友人たちとつながっている。そんな彼が繰り返し言う言葉は、「スーフィズムは愛と平和の宗教」、であった。

「この境内にまる一日滞在して御覧なさい。この場所がいかに平和で愛に満ちているかわかるはずですよ。みな生活の中で様々な苦しみや問題を抱えて

このダルガーにやってきますが、その75%は非イスラーム教徒なんですよ。彼らはここに来て時間を過ごし祈り、幸せになって帰ってゆく。そして願が叶った時にそれを報告にまた来るのです」

まるで示し合わせたかのようなタイミングで、女性たちが嬉しそうに訪問にやってきた。しきりにお礼を言いながら(願が叶ったのであろうか)お菓子を差し出してくる。私もご馳走になった。サルミー師は、タアヴィーズ作りや薬品の調合、そして邪気祓いなども行なうスーフィー祈禱師でもあることを教えてくれた。聖者の後継者一族の知己を得た事は、今後の研究においても大きな成果であった。この縁を大切にしていきたい。

### 2.1.3. b ダルガーと聖者の宮廷音楽

木曜日の夜は、日没から一日が始まるイスラームの時間では休日である金曜日(ジュマ)にあたる。毎週ジュメラート(木曜日)には、夜を徹した宗教儀礼や祈願儀礼などが、特定の聖者廟や聖地、そして個人宅等で行なわれている。音楽を聴く儀礼や陶酔舞踏に陥る集会、そして神の唱名儀礼などタイプは分かれるが、どれもスーフィズムの影響が強く、個人として直接神を念じ、その愛を感じようと行を積む人々が参加者の中核を占める。

本人自ら音楽好きであったニザームッディーンのダルガーでも、木曜の定例カウワーリー音楽会は行なわれていた。しかし、ここはカウワーリーのメッカとも

いえる場所であり、木曜以外でも廟の内外で音楽会が行なわれていることが多い。私が参加した会も木曜日ではなく、3月2日の金曜日であった。アザーンを聞きながら話をきいた若いカウワール（カウワリー楽士）ハイダル・ハサン氏によれば、神への礼拝時間を妨げぬように毎日日没の祈り（マグリブ maghrib）の後にカウワリーが始まるという。ただし、木曜日には大御所のカウワールも一緒に歌うというから、やはりジュメラートの方が特別なのか。

夕方6時半、ライトアップされた美しいダルガーの入り口前には何も無い空間が現出し、それを隔てて向き合い、カウワールたちが座る。跪礼を終えた人々は衣服を整え、ダルガー（上座）とカウワール（下座）が作り出したスペースを冒さないように左辺と右辺に分かれて座る。こうして、音楽を聴く集会ことメヘフィレ・サマア mehfīl-e samā' においてカウワリーのパフォーマンスに必要な全ての条件が満たされた。つまり、会を司る宗教的指導者ミーレ・メヘフィル、聴衆ことスナーワレー、そしてカウワールである [村山a:29]。この場合、ミーレ・メヘフィルは目の前の棺に眠るニザームッディーン・アウリヤー自身となる。聴衆には、もちろんスフィー然とした人たちも含まれるが、参詣にきた一般の男女や外国人など、老若男女や宗教・宗派を問わない緩やかな面々であった。宗教色の強い特別の音楽会では、聴衆の参加資格やカウワールが使用する楽器に制限が課されるが、今回はこの限りではない。

この日は前半と後半に分かれて二つのグループが、次の礼拝時間のアザーンが聞こえるまでカウワリーを行なう。最初の組がグラーム・フサイン・ニアズィーとスルターン・フサイン・ニアズィーのニザーミー・ブラザーズ楽団 (図10)、次がハイダル・ハサンのニザーミー・ブラザーズ楽団である。共に、ニザームッディーンを本拠とする意味でニザーミーを名乗る。従ってニザーミー・ブラザーズは他にも複数存在していることになる。

前後二列からなる楽団の構成は、前列が歌唱と旋律伴奏を担い、後列がリズム（打楽器+手拍子）とコーラスを担う計12人ほどからなる。伴奏楽器は、箱型の手風琴ハルモニウム二台と筒型の両面太鼓ドーラクである。

カウワリーとは、本来、詩の言葉自体が持つ力、リズムを伴う反復性により効果的に作用する言葉、そして言葉とリズムの反復性によって表現された音楽の演奏の三要素が正しく行なわれることで成立する。歌われた声や演奏された音楽は、聴く者の魂をかき乱す。乱され揺り動かされた魂からは神への愛の



図10 カウワリー

感情が喚起され、エクスタシー（法悦）へと導かれる。この到達点をもって、カウワーリーの主要目的は果たされる。つまり、修行者たちを、神と直接交われる状態へと導く装置がカウワーリーなのである。

音楽会の幕開けの歌は、ハムド hamd と呼ばれる神を賛美する詩歌群から通常選ばれる。この日は、南アジアで最も有名なハムドの一つ「アッラー・フー（神よ、あなただけ）」から始められた。この歌は世界的に有名なパキスタンのカウワール、故ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン Nusrat Fateh Ali Khan (1947-97) が作曲したハムドで、ウルドゥー語で歌われる。カウワーリーの名曲としてインド・パキスタンの政治的蟻も、音楽的本家インドのプライドも関係なく歌われている現場は驚きかつ感動的であった。

三曲目には、前述したアミール・フスロウ作詞・作曲の名曲「ラング rang（「色」：歓びの歌）」が歌われた。アミール・フスロウが、愛する師ニザームッディーンとの出会いを綴ったこの歌は、カウワーリーの歌曲の中でも特別高い地位を占めており、この歌が歌われる時には聴衆は通常起立して聴かなければならない。少なくともパキスタンではこの慣わしは守られ、楽器奏者以外のカウワールたちまでが起立して歌う場面が見られた。しかし、ここではそのような作法は見られなかった。カウワーリーの創始者でニザームッディーンの弟子アミール・フスロウがカウワールたちの10m後方に葬られ、ニザームッディーン本人はまさに彼らの正面におわす、まさに中心の中の中心点では、周縁部で行なわれる宮廷音楽の作法とは異なるのだろうか？ では私が起立したかということ、郷に従い、しなかった。この場所でこの歌を聴ける幸運に酔って、歓喜の中にあっただからだ。しばしの間、調査する自分を忘れて聴査（サマア）に入る。

素焼きの灯明皿よ、私の言うことを聞いてほしい  
私の導師の家には「色」がある  
なので、一晩中起きていてほしい  
今日は「色」がある、母さん、「色」がある  
あの人の家の中庭には「色」がある  
今日、私の家の中庭には「色」がある  
私は我が導師、ニザームッディーンを見出した  
私は我が導師、アラウッディーンを見出した  
私は我が導師、フェリードゥッディーンを見出した  
私は我が導師、クトゥブッディーンを見出した  
私は我が導師、ムーヌッディーンを見出した…… [麻田, 89]

全8曲を一時間かけて演奏したが、途中でイラン人からのリクエストによってルーミー作のペルシア語の歌を入れたりしたので、はじめから演奏曲順を決めて

いるわけではないようだ。聴衆たちは、楽士たちへの施しをもって演奏中でも彼らに渡しにくる。カウワールたちは、お礼をするがすぐに演奏に戻る。客の列がダルガーとの間のスペースを歪めると「そこ、はみ出すな。もっと下がれ」と仕草で注意をする。聴衆たちは自由にカウワールを楽しんでいるように見



図11 スンネーワレ

えた(図11)。この第一ステージの演奏記録はすべてビデオに収めることができた。だが第二ステージは途中まで聴いて中座せざるを得なかった、翌日がインドを離れる日だったのだ。インドにおけるカウワール現場を体験できたこと自体が大きな成果であった。

## 2.2. パーニーパトのダルガーにおける所見

### 2.2.1 パーニーパトへの道

ハリヤーナー州パーニーパトPānīpatは、デリーからGTロード(国道一号線となっている)を約90km北上した地点に位置し、人口20万人弱を数える繊維産業が盛んな都市である。歴史的には14世紀から16世紀にかけて、ムガル朝興亡に関する重要な三回の大合戦が行なわれた場所として名高い。中央アジア方面からインドを目指す者は、パンジャブを經由してデリーに入る際に必ずこの地を通過する。それが侵略者であった場合には、デリーから出陣した守備隊と雌雄を決する運命の合戦場となってきた。かような場所に位置するパーニーパトには、必然的に多くの聖者廟が存在している。

今回は、その中からシャルフッディーン・ブー・アリー・カラन्दル(カラन्दル・サーハブ)のダルガーを訪ねた。その理由は、この聖者がカラन्दルという名称をもつことに興味を抱いたからだ。カラन्दルとは、本来13世紀にサーワジーを創始者として、シリアやイランで見られた、全身剃髪してスーフィー修行を積む托鉢僧で名高いカラन्दラー教団の成員をさす。

私はパキスタンのスィンド州セヘワーンの町に眠るラール・シャハバーズ・カラन्दルという聖者を讃える歌謡を調べていた時、シャハバーズにセヘワーンへ行って布教せよと教示した人物としてカラन्दル・サーハブの名を知った。次に、インド世界で動物芸をみせる大道芸人の一集団もまたカラन्दルと呼ばれていることを知った。同時に、ファキール(イスラームの遊行僧)の一集団もそのカラन्दルなる名称で呼ばれている事実がある。そして、カウワールで頻繁に歌われる詩歌の一つがカラन्दル・サーハブの作であることを知るにつけ、この聖者の



図12 ニューデリーのメトロ



図13 ダルガー外門と売店

ダルガーを見てみたい、という願望を抱くようになったのだ。

いざ、処女地パーニーパトへ。最寄のメトロ駅 Rama Krishna Ashram Marg (図12) から一つ目の Rajiv Chowk で乗り換え、Vishwavidyalay 行きで五つ目の Kashmiri Gate 駅へ。この間わずか17分、料金はRs. 9 (約20円)、時間どおりに運行。ニューデリーはこのメトロが開通して本当に便利になったと感じる、ただし手荷物検査とボディチェックさえなければ。

カシュミーリー・ゲート駅から外に出て、道を渡り左手がデリーの中央バススタンドであるISBTターミナル。パキスタン行きの国際バスもここから出発するし、およそ近郊のあらゆる方面へサービスがある。案内所で尋ねると17番線からパーニーパト行きができることが分る。

待つこともほとんどなく席も取れて、13時10分に発車。国道一号線となるGTロードを北上する。時間は1時間半から2時間、料金はRs.48、ハリヤーナー州政府の公営バスである。右手にはチベット難民地区、広大なごみ処理場、一時間走ってようやく緑の畑と牛がいる光景になった。あとはその景色の中に、時々バザールや工場やドライブインが現れてはながれてゆく。

3時半パーニーパト着。バススタンド内ではなく、手前の道沿いに下ろされるが中央車線は工事中で横切るのが大変であった。自転車タクシー(サイクルリキシャー)で早速ダルガーへ。料金はRs.20でまとまった。まずは北へ直進して、パーもある比較的よさそうなスカイラークホテルの角を右折。東へ向かう。しばらく走ってから左折して新しい高級住宅街の中を抜け、女子高を通り、突き当たった細長い道を左折。見えてきた古めかしい門から先はもう参道であった。

門の両脇の店では、チャーダル(奉納布)、プール(花)、お菓子が売られている。珍しいモンゴル系訪問者に店主たちの好奇の視線が注がれる。門を抜けると左折する道があり、そこで車を降りる。GTロードからおおよそ20分かかったろうか。短いながら表参道がはじまる。視線が一斉に集まる。しかし友好的で「サラム(こんにちは)」と声を掛けてくるし、店内から手を伸ばしてきて握手をもとめられた。ダルガーの外門(図13)を入ると右手に図書館、左手に御守(タアヴ

ーズ)を書く祈禱師の事務所、供物を売る店、カセットテープ屋、食堂がわず  
か50mほどの道筋に沿って並ぶ。食堂でチャーイを一杯飲んでから内門をくぐっ  
て境内に入る。

### 2.2.2 ブー・アリー・カラन्दル廟

ダルガーのサルカール sarkār (御上、主君)であるシャルフッディーン・ブー・  
アリー・カラन्दル Sharfuddīn Bū Alī Qalandar (1206-1324) (図14)は、このパー  
ニーパトで、イラク出身の宗教者である父とイラン出身の母から第二子として誕  
生した。両親からイスラームを学び、40歳になるまでパーニーパトで学究生活を  
送った後、デリーに出てムフティー(法学者)として生活していた。イスラーム  
法廷の裁判官カーディーの求めに応じて、イスラーム法の解釈・適用に関しての  
意見文書ファトゥワーを提出する要職である。彼はチシュティー教団のシハーブ  
ッディーンの弟子だったとも [Subhan : 323] [Sharib, 2006 : 69]、カラन्दラー教団  
のスイラージュディーン・マッキー [Alkhamoshi, 2000 :14] に師事したともいわれ  
るが確かなことは分らない。

シャルフッディーンが俗世から精神世界へと傾倒していった説話がある  
[Subhan, 323-4]。

あるとき、彼はいつものようにムフティーとして説法しその学識を誇示してい  
た。その時、一人の遊行僧が戸口に立って彼にこう言った、「シャルフッディ  
ーンよ、お前が生れたのはこんなことをするためではない、いつまでかような係争  
を続けているつもりなのか?」と。その優しい叱責が心底こたえたシャルフッデ  
ィーンは、ムフティーとしての職と地  
位を捨て、ただ一人で平安を探し求め  
る。彼は全ての書物を川に投げ捨てた。  
そして膝まで川の水に浸かって立ち尽  
くす苦行に入ったのだ。

数年間そのまま苦行を続けていた彼  
の耳に、ある日こんな声が聞こえてき  
た、「シャルフッディーンよ、汝の苦  
行には満足した。何なりと願いを申し  
てみよ」。彼が答えて曰く「あなた  
だけがわが望みです。他にはありません」  
。そしてシャルフッディーンの願いは受  
け入れられることとなり、水から上  
がるようにと命じられる。それに対して  
彼は、「もしそれがお望みとあらば、あ  
なたご自身の手で私を引き上げて下さ

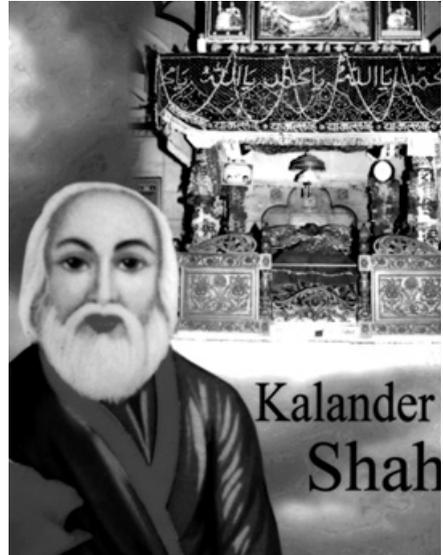


図14 カラन्दル・サーハブのイメージ



図15 ダルガー本殿を正面から



図16 カウワールたち

い。私自身はこの愛で満たされた海<sup>5)</sup>から出たくはないのです」と答えた。すると次の瞬間、何者かが彼を川中から引き上げて、岸の上へと移してしまった。この見知らぬ男の所業に激昂したシャルフディーンは叫んだ、「愚か者め！ 貴様は私が長年積んできた苦行を台無しにしてくれたのだ。あとわずか、本懐を遂げることができたというのに！」

見知らぬ男が言う、「私は、預言者の娘婿、アリーである。そなたは私がーヤドゥ・アッラー yad allah「神の手」ーという称号で呼ばれることを知らないのか？」。男（アリー）はシャルフディーンに神秘的な力を授けると姿を消した。この時から彼はカランドルになった。

「ハイダリーアム、カランドラム、マスタム！<sup>6)</sup>（私はアリーの者、托鉢の遊行者、法悦境の住者）」、これはカランドル・サーハブの詠んだとされるペルシア語の詩の一部で、カウワリーでよく歌われる。

広い内庭の正面がダルガーでカウワリーが聞こえてくる（図15）。ダルガーに付随して墓が並んでいる。右手には巡礼部屋、左手には沐浴場と建築中の大きなマスジッドがある。一見して清楚で落ち着いた雰囲気が感じられる。

花とお菓子は外で買って持ってきた、靴を預けてまずは参拝をしたい。水で清めをしようと花とお菓子を床に置こうとしたら、靴番の老スーフィーが慌てて寄ってきて注意してくれた。地面ではなく、少し高い壇に置かなくてはならなかったのだ。聖者に捧げる浄なる供物（ナズラーナ）は、地面で汚してはならないらしい。

カウワールは廟内の墓石に向かって歌っている。小さな子供二人と父親らしきハルモニウム男とドーラク太鼓（図16）。彼らは、カセットをリリースするとか、いわんや海外公演に呼ばれることとは無縁の本当の旅芸人で、ダルガーの巡礼宿

5) "as for myself I have no desire to leave this 'sea of love!'" [Burhan, 324].

6) *haidarīam qalandaram mastam*.

を渡り歩き、参詣者のお賽銭で生きている。

知ってはいたがわざと頭に被り物をせずに、廟の入り口の側でカウワーリーを聞いていたら、ショールを被った男の人が「頭を布で隠しなさい」と注意してきた。ハンカチで頭を隠す。それにしてもこんなに親切に注意・指導してくれるダルガーは珍しい。

廟は前後二室からなる構造で、手前の部屋がブー・アリー・カラन्दル、その奥がムバーラク・アリー・ハーン Mubārak Alī Khān の墓室になっていた。入り口には24時間消えることがないランプが灯されて、ハーディム（管理人）が番をしている（図17）。ここは、入る時の挨拶をし、帰りに供物のお下がり（タバック）を受け取り、ランプの油をつける場所である。

まず、手前のご本尊からかと思っただが、奥の墓へと導かれた。これが参詣の順番らしい。奥に祀られるムバーラク・アリー・ハーンは、カラन्दル・サーハブが可愛がっていたデリーの王子であった。しかし、この聖者の食べ残しの肉を、お供え物のお下がりと思い違いして、祝福を得ようと食べてしまい、命を落としたのである。常人が神に近い聖者の残り物を食べることの危険性が分っていなかったのだ。非常に深く悲しんだカラन्दル・サーハブは自ら葬儀を行い、こう言ったと伝えられている。「我が墓へ参詣する者は、先にムバーラク・ハーンの墓へ参れ」[Alkhamoshi, 2000:22-23]。ここで花を半分捧げるようにとハーディムに言われる（図18）。



図17 本殿入り口のハーディムたち



図18 ムバーラク・アリー・ハーンの聖棺



図19 カラन्दル・サーハブの聖棺

戻ってきていよいよカランダル・サーハブに参拝。人々は右回り、墓石に身を捧げるように頭をつけ伏して祈る。棺の周りを柵がめぐり、棺には色とりどりの奉献布（チャダ）が重ねて納められ、バラの花がぎっしりと捧げられている（図19）。この調査が順調であるように、家族が健康であるようにと花を捧げて祈る。



図20 ザンジールワレー・バーバー

### 2.2.3 ブー・アリー・カランダル廟での一夜

廟から出てくると、体中に鉄の輪をつけたザンジールワレー・バーバー Zanjirwale Babā（図20）と呼ばれるファキールのところへ案内された。何だか凄い形相で喋り捲り、言っていることがよく分らない。なんでもこの重い枷をつけて踊り、ザンジール（鎖）打ちをやってみせようというらしい。神秘舞踏ダンマールも好きだというが、今回はカウワリーにあわせて鎖うちをやってみせてくれた。だからといって謝礼を請求するわけではなく、自分の献身パフォーマンスを見てもらいたかったようだ。このあと、彼の前を通るたびに呼び止められてはチャーイをふるまわれた。



図21 スーフィー・ジー

先ほどのショールの男が流暢な英語で「ホテルは取ってあるのかい？ ここに泊まりたいならとりなしてあげようか」といってくれるので、半信半疑ながらお願いする。しばらくバーバーにお茶をよばれながらひたすら鎮いていると、呼ばれて廟の最高責任者にお目通りがなかった。ウルドゥー語で訪問目的を告げ、可能ならとめてくださいという静かに了解された。パスポートを渡してエントリー。宿代はないが、気持ちなら受け取ってくれるとのこと。彼はここのハーディムの一人、通称スーフィー・ジーことサイヤド・エジャーズ・ハーシュミー氏 Sayyad Ejāz Ahmad Hāshmi<sup>7)</sup>（図21）。彼の部屋の隣の12号室、8

7) Bu Ali Shah Qalandar Dargah, Qalandar Chowk, Panipat 132103 HARYANA.

畳くらいの部屋をもらった。清潔で電気があり、機材の充電ができる。

しばらくスーフィー・ジーと話をし、ここのウルスは二回あり、ラマザン月11日とシャッワール月9-12日であること。そして世界の三大カランドルとは、Bu Ali Qalandar、Shahbaz Qalandar、Rabiya Basuriであるとも教えてくれた。また私を厚意でここに導いてくれたショールの男は、スーフィー・ジーに「良いことをしましたね」と言われて、子どものようににはかんでいた。

これで、一晚中ダルガーにすることができる。もう一度よく見ようと廟内へ入る。願掛けの南京錠が、格子や柵にぎっしりとつけられていた。願いが叶うとお礼参りに来てこの錠をはずす。日本の絵馬のように個人的な願いを書いたヒンディー語やウルドゥー語での手紙も、糸で吊るされている。写真を撮って、後で試しに一件解説してみると次のような内容であった(図22)。



図22 願掛け錠と手紙

「786<sup>8)</sup>。カルバラーの殉教者ハズラット・アッパース様<sup>9)</sup>。私はシャヒード・アフマド、汚れた悪霊gandā sāyāに取り憑かれています。その憑物が出てきますように。それが家から出て行きますように。それが処罰されますように。家族たちの煩いが家からなくなりますように。親愛なる預言者(ムハンマド)の激昂をもって、御身の僕の名誉を守りたまえ。ブー・アリー・シャー・カランドル様の柩に(この願い書き)を吊るす。」



図23 ファキール(遊行者)

8) 「慈悲深き慈愛あまねき神の御名において」 bism Allāh ar-rahmān al-rahīmを意味する。

9) 「水運び人」として有名なアッパースは、アリーの息子フサインたち一行をカルバラー(イラク)の戦場で守ろうとして殉死した。シーア派信者にとって身近な、そして尊い英雄である。

ランガルハーナ Langarkhāna で、野菜と肉のカレーにチャパティーと水をいただく。参詣者たちの心づけでランガルは機能し、無料の食事を提供できるのだ。寝泊りしているファキールたちと話しながらか楽しくおいしくいただいた(図23)。近所の人たちもやってきてごろごろしながら会話を楽しみ寛いでいる。一人のファキールがハッシシをすすめてきたが辞退する。彼らはパキスタンのこともよく知っていた。ラホールのだター廟のウルスへ行くといったら、「私たちからのサラームを必ず伝えておくれ」と託された。

もう一度カラダル・サーハブに礼拝してバーバーと話していると、ラーナーさんという地元のヒンドゥー教徒ビジネスマンが話しかけてきた。毎日夜にはお参りに通うことを日課としている。スーフィー・ジーに私のことを聞いて待っていたようだ。彼は「一年半毎日お祈りに来るようになったらビジネスが劇的に好転したのです。サルカールのおかげです!」と嬉しそうに語り、本当にご利益を感じ取っているのである。彼が出て行った後、私も外へ出てみたくなった。

夜の売店でカウワーリーの映像に見入っている人ごみ。ここのウルスのプログラムだというVCDとテープを買った。バザールで水とジュースとビスケットを買っていたら、小さな子供をつれたショールの男アルヴィンドさんと再会する。すぐ隣だという自宅に招き入れられ、ブドウ、ビスケット、チャーイをご馳走になる。彼はヒンドゥー教徒であった。『マハーバーラタ』を知っているという。結婚前にダルガーで奉仕として下足番をしていたので、三人の息子にめぐまれたのだといていた。印刷屋だが、常時仕事はしていない。最低限の生活に必要な金が要るときだけ訪問セールスをして仕事をとっているという。ここでも参拝者に宗教の隔たりはない。

もう9時40分、部屋に戻る。夜10時ダルガーの扉が閉まった。こんなに墓の近くで眠るのは初めてであった。カウワールまでわずか20メートルの部屋、スーフィー・ジーのすぐ隣の部屋。考えてみれば幸運である。ここのファキールたちも一般人も「あなたがここに來れたのは、カラダル(サルカール)が招いてくれたからです」と口をそろえたようにいう。私心というものが無いのだろうか? 誰一人何かを与えよと直接にも間接にもいってこないのだ。もう少しゆっくりできる余裕があったらこの部屋にもっといてみたい。懐中電灯さえあれば、夜のトイレの問題もクリアするし、何一つ不自由はない。蚊が一匹邪魔をするので毛布を被って寝た。

雷の音で目が覚める。外はまだ暗い、5時から6時頃。雨も降っているようだ。大理石の境内がぬれる。バーバーは寒くないのだろうか? 朝のナマズの後、廟の扉が開く。今日は参道の模様を記録しなくてはならない。カウワールの名前も聞いておきたい(北部州からきた貧者という)。廟前の門前で樽型の両面太鼓ドール dhol を叩く少年がいた。ドール置き場も廟に向かって右角にあった。一週間いて観察したら面白いケースがとれるだろう。

内門の内部の売店で縁起本や聖者の絵を買う。出発の仕度をしているとスーフィー・ジーが部屋に入ってきて、タバックとしてカランドル・サーハブの棺に掛けられていた奉納布(チャダール)を首に巻いてくれ、お菓子(バターシャー)をくれた。聖者のバラカとバラの香がたっぷり染み込んだ緑色のチャダール。これは研究会の御守として、今でも会の開催時には正面に広げられている。この時、握手にまぎれて廟への寄付としてお金を渡す。鍵を返そうと部屋を訪ねると、彼はタアヴィーズも書いていた。挨拶をして部屋を出る。靴下をはいて靴をつける。「フダーハーフィズ(さようなら)」を唱えながら境内を出る。リキシャーでバススタンドへ。サラールガンジ門を抜けてほどなくGTロードのバススタンドへ。13時12分、バスは動き始め、15時07分にはデリーに着いた。

### 3—インド的イスラームの断片とは

#### 3.1 ダルガー聖域で見られるもの

全二回に及ぶインドのダルガー調査から得られた情報を整理してみたい。これらの情報には、中央アジア的イスラームとインド的イスラームを分かち、何か重要なヒントが隠されている筈である。

まずは、見る事ができた物や行為、行為者等を分類してみよう。ここでは、ダルガーを中心点としたモハッラ *mohalla* (街区)を、ダルガーが発する大小の聖なる力が及ぶ聖域と仮定し、1.ダルガー参道、2.ダルガー境内、3.ダルガー本殿からなる三区域に分類することとする。

A.とはダルガーへと直結する表参道・裏参道、そしてダルガー境内の門(入り口)へと至る隣接した小路などからなる、参詣者が利用する道を意味する。ダルガー聖域外に位置する聖域への通路のことである。B.はダルガー入り口の門から内側の全域(本殿は除く)を指し、本殿を内廷とすれば外廷といえることができる。C.は聖者の棺を中心とした参詣の目的地となる施設である。

##### 3.1.1 ダルガー参道で見られるもの

インドでダルガーといえば、通常イスラーム教徒のモハッラが形成されている。このエリアに入るとイスラーム帽やベールを被り、手に数珠を持つ人々が多くなる。そして、肉屋や肉料理を提供する食堂、マズジッド、イスラーム書店や印刷所、香水やショールの小売店、巡礼等の旅行代理店や両替屋の数が目立つようになる。物乞いたちの姿も見える。

参道で最も特徴的なことは、参詣の際に奉納する贈り物：ナズラーナ *nazrāna* の名で総称される品々を売る店が現れることである。ナズラーナとして一般的なものは、奉納布：チャダール *chādar*、バラの花：プール *phūl* (グル *gul*)、そして白砂糖菓子：バターシャー *batāshā* や炒り甘米：キール *khīl* といった甘菓子類で



図24 ナズラーナの売店  
(ニザームッディーン廟)

ある(図24)。これらは、聖棺に奉納され聖者の祝福バラカ *baraka* を付与された後、祝福されたお下がり(贈物)タバッルク *tabarruk* と名を変えて参詣者にその一部が下される。線香：アガルバッティー *agarbattī* も売られており、ダルガーを清め芳香で満たす目的ではあるが直接タバッルクとはならない。しかし、その灰がタバッルクとなる場合もある。以上の四点が代表的ナズラーナ・グッズである。

訪問者：ザール *zā'ir* 或いは旅人：ムサーフィル *musāfir* の名で呼ばれる参詣者は、純粋なレジャーとしてダルガーに来ている側面もある。そのため、観光地で見られるようなお土産屋も軒を連ねている。女性や子どもを対象にした、腕輪・髪飾り・ネッ

クレス等の装飾品、そして化粧品、薬品や玩具が売られている。土地名産の漬物：アチャール *achār* も人気がある土産物である。少々宗教的趣向が強い参詣者には、聖典クルアーンの文言を引用した壁掛けやプリント、聖者の絵、聖者の生涯や奇蹟などを記した巡礼読本、様々な既製品の御守・護符、数珠が目に入るであろう。クルアーンの朗誦や宗教的な賛歌に、それぞれカウワリーの歌を納めたカセット、CD、ビデオCDも豊富だ。

参詣者を受け入れるホテルや巡礼宿、貧者や旅人に無償で食事を提供する救貧院ランガルハーナ *langarkhāna* も見てとれる。と同時に、ランガル用の食べ物を扱う店もあって、「一釜600ルピーの炊き込みご飯を布施して行きなさい」などと、功德の喜捨：ハイラート *khairāt*<sup>10)</sup> をするよう参詣者に声をかけているのである。

アーミルたち祈祷師の相談所やダルガーと深く繋がるカウワールやドーリー(ドール太鼓奏者)たちのデーラ *dera* と呼ばれる接待所兼事務所もある。

公衆便所が少ないインド・パキスタンでは、参道商店街共有の便所をチップを取って利用させるケースも多い。そして、境内に近い参道の商店は参詣者の履物をチップで預かることもしている。

### 3.1.2 ダルガー境内で見られるもの

外界から境内に入場する際、参詣者たちは門の柱や階段に右手又は両手で触れる。又は接吻する。ここから聖者のバラカが及ぶ聖域コンプレックスとなるため、

10) 「ハイラート」と聞こえる。

それを触れることで体内に付着させようとするのである。

ダルガー境内に一歩足を踏み入れれば、すぐに靴を預かる係から声がかかるであろう。札と引き換えに履物を預け、裸足のまま礼拝前に水で身を清めるウズー wuzū をしに行く道順である。

ウズーの場はダルガーの規模によっては屋内にも屋外にもあり、銭湯のように横一列にカランが据えられている(図25)。ここでまず、両掌を洗い、その右手で水を汲んで口をゆすぐ。次に、右手で額に水を打ち両手で顔全体を清める。続いて掌に汲んだ水を真下に落として肘までの両腕を洗う。最後に両手で両足を洗う。Platts [1196] にはその順番が記されているが、それぞれの段階で何回ずつ水を打つかについては、私が観察したところ三回ずつが多かった。

境内には、マスジッドが併設されていることもある。さらには、ナズラーナ売店やカウワールたちの住居兼事務所、儀礼用楽器置き場、ダルガーを管理するハーディムやサッジャーダナシーン、ガッディーナシーンたちの事務所が見られる。

香炉台や灯明台も必須アイテムである。持ってきた線香は、自ら中身を取り出してランプや蠟燭で点火し香炉に納める(図26a,b)。或いは、箱のまま直接本殿内の聖棺に納める。インドでは油を使ったランプが一般的で、その油は参詣者の浄財によって賄われ、一日中消えることがないランプの火を燈し続けるのである(図27)。

聖者が葬られた場所は、もともとが



図25 ウズー場(ニザームッディーン廟)



図26a 香炉(アミール・フスロウ廟前)



図26b 香炉(カランダル・サーハブ本殿)



図27 さまざまな形の灯明  
(カラन्दル・サーハブ本殿)



図28 南インドからの巡礼者夫婦  
(カラन्दル・サーハブ本殿)

墓地であった例も少なくないため、境内には古くからの墓も見られる。同様に、聖者一族の墓や聖者の近くに葬りたいあやかり墓も多数見られよう。

参詣者たちは境内では、家族で食事をする、聖典や巡礼本を読む、知り合った人とおしゃべりをする、施しを求める、礼拝指導者や管理人に悩みを打ち明ける等、思い思いに過ごす。

### 3.1.3 ダルガー本殿で見られるもの

聖者の棺を納めた建物、または墓そのものに近づく為に、男女共に頭を帽子や布で覆い隠し、衣を正す。聖者によっては、例えばニザームッディーン・アウリヤーの場合など、本殿の外部までは接近できるが内室へ女性が入れない場合もある。また、男女別に入り口があるダルガーもある。ここでも参詣者は、本殿の建物に手で触れ接吻する。聖者の棺に近いことで一層強いバラカが得られると考えられている。もちろん、最も強いバラカは、地下に眠る聖者自身の遺骸に触れることで得られるが、その代わりに地上に参詣用の棺があるのである。参詣者は、この聖棺とそれを取り囲む柵や天蓋からなる、いわゆる聖者の玉座に詣でるため旅してくるのだ。

参詣はハーディムに案内されて行なうのが一般的である。まず、ナズラーナを聖棺に奉納し、チャーダルや柵に触れてから、棺の脇で両掌を上に向け、クルアーンの序章ファーティハ fatiha を唱える (図28)。柵を触りながら棺の周りを時計回りに歩き、再びチャーダルに触れたり接吻したり (図29)、タバッルクとなった花や葉子を頂戴する。ハーディムの厚意でチャーダルを頂戴することもあり得る。棺の足下に置かれた緑色

の賽銭箱に寄付金：チャンダー chandā として現金を入れるものもいる。ハーディムは参詣者から普通は謝礼を受取らない<sup>11)</sup>。参詣者は聖棺に尻を向けぬよう後ずさりながら本殿から退場する。

本殿の中には、聖棺の他にも聖者と深い結びつきがある人の墓や、参詣者たちが奉納した大理石のプレートや時計、灯明台：シャマアダーン shama'dān、そして聖典クル

アーン等がある。聖棺に向って自分の言語で願掛け：ドゥアー-duāをひたすらする人々。窓枠や格子に目をやれば、びっしりと掛けられた願掛けの南京錠、結ばれた色糸や絵馬のような祈願文が書かれた手紙が見えてくる (図22)。

私的願掛けは一種のコミットメントである。願いを叶えてくれたら、そのお礼に参詣に来て善行を施すことを誓う。もし願いが実現した際に、お礼参りを果たさず約束の善行をなさなかった場合には祟られてしまう。また、お礼参りの日まで自分の南京錠を外すことはしない。

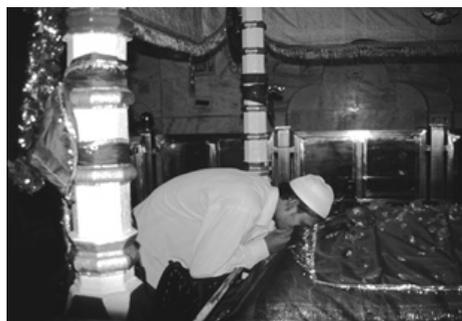


図29 チャーダルに接吻しバラカをいただく (カランダル聖棺にて)

### 3.2 浄・不浄の観点から見たダルガー

インド・アーリヤ古来のバラモン教的世界観を基層とするヒンドゥー社会構造の中で、特定の社会的機能を担う低カースト集団、ましてや4 ヴァルナ<sup>12)</sup>の枠組みに入らない不可触賤民とされた社会集団が、土着のインド人でイスラームに改宗した多数派であると仮定する。それ以外のムスリムは、高カーストから上流ムスリム (ムハンマドの血族としてのサイイド sayyid) に改宗したものや、西アジアや中央アジアからムスリムとして移住してきたものであるとする。

彼らムスリムの大多数は、ヒンドゥー社会の最下層に置かれていたからこそ「神の下の平等」を原則とするイスラームに緩やかに改宗してきたと考えられる。ムスリムは、外来の侵略者がインド伝統社会の中で皮革加工、洗濯、清掃、屠殺、娼婦など賤業視されていた職種の担い手であったのだ。『マヌの法典』(5.135)には、人体に関わる不浄物だけでも、脂肪、精液、血液、頭垢、大・小便、鼻汁、耳垢、痰、涙、眼脂そして汗の12が規定されており [マヌ :161-2]、これらに接触する職種は不浄とされてきたのだ。現在でも、カースト・ヒンドゥーといわれる

11) しかし、中には本殿入り口に賽銭箱と記帳帖を広げて陣取り、高圧的に高額なチャンダーをせびるハーディムもいる。

12) 「種姓」いわゆる、ブラフマン (バラモン)、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラ。

4 ヴァルナに属する一般住民がムスリムを蔑視する根本思想は、彼らの生業では避けられない「穢れ」を畏れるからなのである。

では、穢れは何によって伝わるかということ、不浄物に「触れること」によってである。このヒンドゥー教徒の浄・不浄の観念や意識、穢れの概念を、ヒンディー語でチュートウチャートウ *chhūchhāt* という。もう一つの名詞チュートウ *chhūt* は、「触れること、接触すること、不潔なものやけがらわしいものに触れること、伝染、感染、不浄なもの、穢れ」を意味する〔古賀・高橋：450a〕<sup>13)</sup>。

イスラームには、神聖不可侵そして不法や罪悪を意味するハラーム *harām* という言葉がある。しかし、ハラームは元来イスラーム法に照らして不法であるという点で、インド的な浄・不浄の概念とは異なる。イスラームにおいて礼拝ができない不浄な場所として、墓場と屠殺場が特定されている。さらには豚肉を指して「不浄の肉」という場合もあるが、これとてアッラーに禁止されているから恐れるのであり、自分自身の体と環境まで穢れが及ぶことを問題とするチュートウと同じではない。

ダルガーの聖域は、正しいイスラーム環境が守られていなくてはならない点で、ハラームであることは明白だ。だが、観てきたように聖者の宮廷であるダルガーで営まれる作法の中には、ハラームというよりもチュートウを避けるための幾つかの所作や慣習があると思われる。インド的イスラームを判別する際の重要なヒントとして、本稿では以下の三点を指摘したい。すなわち、1. 供物であるナズラーナの聖浄性を保つための作法、2. ダルガー聖域の聖浄性を保つための作法、そして、3. 下されたバラカの聖浄性を保つための作法である。

第一の「供物であるナズラーナの聖浄性を保つための作法」とは、ダルガー聖域全体を穢れから守ることの一部ではあるが、直接聖者に捧げようとする供物自体を汚さないようにすることである。具体的には、ダルガー境内でも本殿でもナズラーナを直接地面に置かない行為をさす。ヒンドゥー寺院でも供物を捧げるまでは大切に扱う同様の伝統があるが、これはむしろヒンドゥー的伝統がハラームに読み替えられて定着していると考えられる。

『マヌの法典』(5.143)には、「如何なる方法によるも、物を運べる時、不浄なる(人、或は物)に触れたる際には、その物を下に置かずして水を啜らば清浄となるべし」〔マヌ:162〕とある。前述したパーニーパトのダルガーで、状況は異なるが運んでいたナズラーナを地面に置いた私は注意を受けた。自分が不浄となっても、下に直接物を置かない事が規定されている点に注目したい。下に置かれた物は新たな穢れを持つからである。穢れた贈り物を聖域に持ち込んではいけなし、ましてやそれを聖者に捧げる行為など、聖者に対する畏れを知らぬ冒涇とし

13) 他動詞「手や指で触る、触れる」、自動詞「触る、接触する」ともにチューナ *chhūnā* 〔古賀・高橋：450a〕である。

かうつらないであろう。

第二点目は、境内そして本殿の聖浄性を保つため、外部から穢れを持ち込まないようにすることである。

まずは、この点で諸悪の根源となる物は参詣者の履物である。履物は脱ぐだけでなく、聖域内に持ち込んでもいけない。従って靴番に預けなければならないのである。

2005年に訪問したウズベキスタンの聖者廟やマスジッドで、靴を脱いだことが思い出せない [村山 2007b:203-204]。ブハーラー郊外、ナクシュバンディー教団の開祖バハーウッディーンの聖廟コンプレックスを訪ねた時、広い聖域ではあったが誰一人として裸足のものはいなかった。南アジアの寺院やマスジッド、ダルガーならどんなに広くても履物を履いたまま中には入れない。イスラーム、そして中央アジア的イスラームとインド的イスラームとの差異は、履物を「穢れを運ぶ容器」と見なすか否かの観点から掘り下げることができるかもしれない。

さらに、マスジッドでの礼拝前に行なう水による浄め：ウズーを、ダルガー参詣前にも可能な限り行なうようにしている点も注目に値する。ウズーは、イスラーム的清浄さ・清潔さとヒンドゥー的清浄さが共通し合わさった装置であろう。『マヌの法典』でも、不浄なものと接触した場合は、「沐浴」によって浄められると規定されている [マヌ：155]。

また、ダルガー本殿から退出する際、棺に尻を向けない作法も、大便の不浄性を聖者から隠すためかも知れない。

第三点目は、聖者の棺に（或は生き聖者に）触れられて、ただのナザル（ナズラーナの単数形）は、バラカを有したタバッルク（ヒンドゥーだと神の食べ残しプラサード prasād）となるが、その有効性を維持させるための作法である。基本的にはナズラーナに対する作法と共通している。タバッルクとして首に掛けてもらったチャーダルを、床上に置いていたら注意をされたことがある。また、たくさん貰ってきたバターシャーやキールが食べきれないので、宿の従業員にあげようとしたらムスリムではないが大変喜ばれたことがある。

一番大事な事は、タバッルクを不潔な場所や穢れる場所に置いたりして粗末にせずに、大事に身につけ、或いは食して体内に取り込むこと。そして可能な限り、必要とする人に聖者の祝福力の一端を分け与えることであると考える。

触る行為は穢れの伝達だけかということ、見てきたとおりその逆にバラカを得るための手段でもある。ダルガー聖域内の建物や聖者の棺に手を、頭を、唇をつけて直接欲しいだけバラカを受取ろうとする。この点では中央アジアのウズベキスタンでも同様で [村山 2007b:204-209]、聖廟境内に置かれた古聖木の下をくぐったり、木に体を押し付けたりして願掛けを行っていた。また、水の聖者ヒズルの聖地から汲んだ水を椀に張り、参詣者が飲めるようにしていた。パーニーパトのダルガーでは、坂本龍馬の墓石よろしく、ご利益があるとされる墓石が削り取られ

ていた。どの例も、バラカを付帯する物に接触して、直接その祝福を取り込む構造では一致していたといえよう。ただ、インド・ヒンドゥー世界と共存するイスラーム伝統では、触りと取ろうとしたバラカをチュートウの穢れからも聖別しなくてはならなくなった。この前提に立って、インド的イスラームの思想が形成されてゆくことになるのである。

## —おわりに

インドにおけるダルガー聖域の特徴を、イスラームとヒンドゥーの両文脈から、「穢れとは何か」を意識した参詣者の宮廷作法を解きほぐす作業は、理論的にも実践的にも、いまだ試行錯誤の中にあるといえる。今回はダルガー聖域の環境と参詣者の営みを描写することに力点を置いたため、十分な分析ができなかったからだ。それでも、時に情緒的でさえある浄・不浄観を試薬として投入することで、新たな解釈への布石となったかもしれない。

検証すべき課題は多々あるが、救貧院ランガルハーナの情報は必要である。ティムールを見習ったムガル帝国の皇帝たちは、功德の一つとして高名なダルガーに大きな鉄鍋デグ deg を奉納している。参詣者たちが持ち寄った食材を一つ鍋の中で調理して、ランガルとしてみなに提供しているのである。これこそ、インド的不浄の概念に対する中央アジア的イスラームの勝利の印と解釈してよいのではないかと考えるからである。

さらには、ダルガー聖域で見られる聖者や廟の管理者たちの作法を、中央アジアからのイスラーム王朝で営まれた宮廷作法 [Tirmizi:48-59] [Moini:60-75] と、伝統的なヒンドゥー神殿における礼拝作法の構造比較を踏んだ分析の中から解きほぐしてゆく手法も、今回は実践に及ばず残念であったが、フィールドワークのなかで有効であると考えている。

インド的イスラーム要素を抽出するといっても、地域差が大きいこの亜大陸全体に適合しうる解答は得られないかもしれないが、次回に紹介するパキスタンのラホールの例と合わせて、中央アジアからデリーへと至るイスラーム到来の王道から一步一步検証しなくては、何も始まらないのである。

「デリーはまだ遠い」、何とも心の底にまで響いてくるニザームッディーンの名言ではないか。

## 《参考文献》

- 麻田豊 2004 「カッターリーの詩世界——インド・パキスタンのイスラーム宗教歌謡」『総合文化研究』8、pp.59-89、東京外国語大学総合文化研究所。  
麻田豊・鈴木斌 1980 『ウルドゥー語常用6000語』大学書林。  
アルヴィー、ムハンマド・ライース 2005 『ガザルへの誘い』謝秀麗（訳）、高安幸子（画）、ウルドゥー文学会。

- 古賀勝郎・高橋明（編）2006 『ヒンディー語—日本語辞典』大修館書店。
- 『マヌの法典』1953 田辺繁子（訳）、岩波文庫。
- 村山和之 2007a 「カッターリーの現在地——インド・パキスタンのイスラーム宗教歌謡」『表現学部紀要』07, pp.27-44 和光大学。
- 村山和之 2007b 「イスラーム礼拝施設実見録——ウズベキスタン・オアシス都市での祈り方」『東西南北2007』 pp.199-209、和光大学総合文化研究所。
- Alkhamoshi, Bashir Ansari 1976, *tazkirā auliyā-e-karām pānīpat*. Islam Book Sellers. Panipat (in Urdu).
- Alkhamoshi, Bashir Ansari 2000, *tazkirā auliyā-e-karām pānīpat*. Islam Book Sellers. Panipat (transl. in Hindi)
- Moini, Syed Liaqat Hussain 2004, “Rituals and Customary Practices at the Dargah of Ajmer,” *Muslim Shrines in India*, pp.60-75. ed. C. W. Troll(First Pub.1989), Oxford University Press.
- Platts, John T. A. 1884, *Dictionary of Urdū Classical Hindī and English*. (re: 1982), Oxford University Press.
- Tirmizi, S.A.I. 2004, “Mughal Documents Relating to the Dargah of Khwaja Muinuddin Chishti,” *Muslim Shrines in India*, pp.48-59. ed. C. W. Troll(First Pub.1989), Oxford University Press.
- Schimmel, Annemarie 2003, *PAIN AND GRACE*. Sang-e-Meel Publications. Lahore.
- Sharib, Zahurul Hasan (Dr.) 2004, *Dilli ke baees khwaja*. Taj Publishers, New Delhi.
- Sharib, Zahurul Hasan (Dr.) 2006, *The Sufi Saints of the Indian Subcontinent*. Munshiram Manoharlal. New Delhi.
- Subhan, John A. 1938, *Sufism : Its Saints and Shrines*. Cosmo Publications (re: 1999), New Delhi.
- Yamane, So 2006, *pākistān men nazar-e bad kā tasawwur aur is kī riwāyat*. Museum Educational Service. Islamabad.

[むらやま かずゆき]